
ただの生活記

鯖味噌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただの生活記

【Nコード】

N8697Y

【作者名】

鯖味噌

【あらすじ】

幻想郷での生活をただただ綴ったものです。

この作品は小説を読みながら作った作品ですので、その小説様に大変影響を受けております。もし不愉快に思われる方がありましたら削除させて頂きます。また続くかは不明です

1 ページ目

雑草や木の根が入り混じった混沌の様相を晒している荒れ道を荷台に乗りながら眺めています。

わたしの心情は最悪の一言でした。

荷台には私と何処から採ったのか、不思議な形をした茸が所狭しと並べられています。

出発前に、新しい靴で出かけようとした自分が憎らしい。

せっかく久しぶりの遠出だというのに、足には靴ずれができてしまい、荷台の中では不思議きのこ（わたし命名）が放つ異臭で景色を楽しむ余裕がありません。

「起きたか？」

突然声を掛けられたわたしは内心焦りながら初めに疑問に思ったことを聞きます。

「わたしが荷台にいるのは分かりますが、この大量の茸は？」

「森で採ってきた」

「森・・・？まさか魔法の森ですか？」

「他に森なんてないだろうに・・・。それより後半刻程で集落につくからそこからは自分で歩きなさい」

「もちろんです」

そうしてわたしは集落に近づくまでの半刻を、異臭と揺れによって常に喉元までせり上がっている酸っぱいものと戦うのでした。

摩耗してすり減った心を引きずりながら自宅のドアに手を掛けました。

「・・・ただいま」

人がおらず火の灯っていない家からはただ無音の返事が返ってきます。

父は集落に着くとすぐに大量の茸が詰まった荷台と共に自身の家へと帰って行きました。

机の上には今朝の出発前に作っておいたビスケットが置いてありました。

「今から夕食を作ると火が必要になるからこれで・・・」

あまり食べるタイプではないので今日はこれで済ませてしまいます。さすがにビスケットだけでは足りないなのでお腹がきゅーっと鳴ってしまいます。

「明日の朝は少し豪華なものを作ろう」

小さな決意をして就寝の支度を済ませて床に入ります。

昨夜は久しぶりの遠出で、定時には起きられないと思われました。幸いきつちりと定時に目が覚め、3分で着替えを済ませて荷物を掴んで部屋を飛び出し、朝食がわりに昨日の残りのビスケットを口に放り込んで颯爽と出勤・・・！

したところで目が覚めました。正午でした。

「えええっー？」

遅れても出勤し、先生からのお小言と頭突きをいただくことが、本日の仕事になりそうです。

「はぁー・・・」

心からため息がもれだします。

寺子屋に到着したのは午後の2時でした。

「今日の授業は終わったぞ」

予想通りの言葉は、集落に一つしかない寺子屋にて教師を行っている先生。

「あ・・・おはよう、ございます・・・」

「うむ、おはよう。もう昼を過ぎてしまったが」

と返事を返してきます。

これはおかしい。わたしは言葉を失い、しばし立ち尽くしました。

「ん？なにをしているんだ？」

「え、だって・・・」

先生の教育はスパルタ式。寝坊して遅刻しようものなら強烈な頭突きをお見舞いするはずなのです。それがないとは、どうかしたのでしょうか？授業用の紙を忘れたときも、焼鳥屋さんとの約束に遅れた時も、欠かさずに頭突きをもらいました。それを忘れるなんて、あるかどうか・・・。

「生徒は帰ったし、プリントも出来てあるから今日は帰っていいよ」

今来たばかりのわたしに先生は容赦のない言葉を投げかけました。

「え・・・あ、はい。お疲れ様でした」

「うむ、お疲れ様。昨日は久しぶりの遠出だったのだろう？疲れが顔に出ているよ。授業は一人でも大丈夫だから疲れがとれたらきなさい」

いつの間にか数日の休みをいただいていたわたしは、その足で商店へむかいました。

野菜と干し肉、魚に漬物といった各種の食べ物を買ひ込み、自宅へと向かいます。

自宅と商店の途中には父の家があります。

父はいつもこの幻想郷内を徘徊し、なにか珍しいものを見つけては拾ってきて家に貯めこんでいます。

わたしは仕事が終わったこともあって食材を自宅にしまってから父の家に寄ってみました。

「ん？どうした」

「いえ、先生からお仕事の休みをいただいたので昨日の茸を何に使うのかと・・・って、話の最中に本を読みだすのはやめてくれませんか？」

「鬼に会いたくてな」

本からインクの香りが漂ってきます。

「鬼ですか、実在するんでしょうか」

「豊かなイマジネーションで想像してみたらどうだ？」

「豊かすぎて、知らないことを考えると妄想になってしまったため、分からないことがあれば調べずに即質問します」

「わかった・・・もったい」

呆れた声でいいます。

「幻想郷には、かつて鬼が居たとされている」

父が本を読みながら言いました。

ふと本の題名が気になり覗いてみました。

「幻想郷縁起・・・」

「そうだ。幻想郷の歴史書には鬼の存在が確認されている」

「でも外で鬼らしきものを見たことはありませんよ？」

「地上ではな。だが彼らが退魔師や人の恐怖から滅されたという事実は確認されたことがない。伝承に曰く、鬼は人に対して愛想を尽かしたため地下に潜ったそうだ」

「愛想をつかす・・・」

「納得はできるぞ。鬼は嘘を嫌う。人は嘘でもつかなければ鬼とは戦えないだろう」

「ああ、それならありえますね」

「人は生きるために鬼に嘘をつき、鬼は嘘をつく人に愛想を尽かした。しかし人の心には鬼を知らぬ者にも漠然とした恐怖が存在する。その心が鬼を存在させていると思えば、人は鬼に対して向き合ねばこのままであろうな」

「結構調べてらっしゃるんですね」

「こんなもの探求にはいらんよ。それはもっと深遠なものだ」

わたしは父との会話の後、自宅へと戻り夕食をいただきました。

夜の帳が落ちる頃、わたしは父が鬼に会いたがっていることを思い出しました。

「鬼さんおいでませー」

わたしはそう願った後、昨日の疲れもあり床へとつきました。

わたし 〓 あの茸は結局なんだっ たんでしょうか

父 〓 明日は何処へ行こうか

先生 〓 明日の寺子屋の準備をしなければ

焼鳥屋 〓 早く帰ってこないかな

鬼 〓 幼女の予定

作者が小説を読みながら適当に作りました。その為その小説様に変影響を受けております。不愉快だと思われる方がおれば削除させて頂きます。またこれは気ままに作った作品ですのでプロット等も存在しません。更新は月に1度程度できればいいなと思っています。

1 ページ目（後書き）

続きはないかもしれませんが

2 ページ目

山スタート。

まさかの妖怪の山スタート。

わたしは今、山にいます。天狗に掴まれて

「い、いったいどうしてこんな状況に・・・？」

山は風が強く、そのうえスカート。

着替えもなく、家に帰ることもできず、手荷物もお菓子のみ。

先行きの不安さでは、なかなかないという状況でしょうか。

「なぜ？」

「あややや、どうかしましたか？」

わたしを掴んでいる天狗も一緒にスカートが風に吹かれて捲れているのですが、気にしている風ではありません。翼のはえた天狗妖怪には乙女の常識は一切通用しません。

「一緒に山菜を採っていた人たちは？」

わたしは4人で山付近の野草を採っていました。他にも近くに3人いたはずですが。

「あややや、部下に聞いてみますね」

天狗さんはきよときよと周囲を見渡して・・・笛を吹きました。

笛の音が山に響くと犬耳天狗が天狗さんめがけて飛んできます。

「どうかしましたか？」

「山の近くにいた人間はどうなった？」

「たぶん、しんだ」世間話のように答えます。

いやーん、と叫びたくなります。

さすがは幻想郷でも際立って排他的な、妖怪の山。

こういうところがちょっと怖いというか、妖怪と接していて不安になります。

しかし、ここは幻想郷。わたしも心を持ち直しさらに質問をします。

「わたしはどうなるのでしょうか？」やはりたいせつなのは自分です。

「手違いで連れてきてしまいましたからね。麓までおくりますよ」

自力だったなら、生きて帰れるかどうか。こうしておくってもらえるのは、わたしの運が向上してきたからでしょうか。

こうしてわたしの初めての「妖怪の山」訪問は終わったのです。

運んでもらったあと話を聞けば、妖怪の抗争に巻き込まれたらしいです。やはり、わたしの運は下降中のようにでした。

ただの生活記

ガリガリガリガリ。

ガリ版用の鉄筆が、延々と寺子屋に響いていたのも数日のことでした。

先日の抗争の後、わたしが明け暮れたのは、寺子屋で使う教材作りでした。

教材といっても専門書のようなものではなく、小さな子供に文字を教える等を目的とした、ほとんど絵本と大差ないようなもので、ま

るで仕事をした気分はありません。

さしたる徒労もなく脱稿してしまったら、早くもやる事がなくな
ってしまいました。

「先生、仕事ください」

珍しく授業が終わっても、焼鳥屋さんに会いに行かなかった先生に
詰め寄ります。

「うん、ないな」

「ないことはないでしょう」

「・・・掃除くらいしかないぞ」

「もうしました」

ちなみに毎日しています。

困ったように先生は腕を組みます。

「休暇が終わったばかりだが、また休暇をやるう」

まさか、仕事を催促したら暇をだされるとは・・・。

「さて、私はこの後用事があってね」

先生は妙にそわそわしながら出て行きました。

それから数日、わたしの生活は平穩そのものでした。

「・・・お茶にでもしますか」

わたしは一日に4回ティータイムを楽しみます。することないから。時は五月、あの可愛い果実、桜桃の季節であります。

その圧倒的な可憐さ、赤を基調とした色彩、透きとおるようにきらきらと輝く姿はまるで名画のような佇まい・・・。そのままいただいても結構なのですが、お菓子の材料となれば千変万化のご活躍。

ですので、本日もデザートは桜桃づくしであるのです。

「桜桃満載のロールケーキ、美味しそうです」

桜桃をスポンジとクリームで挟み、その上に桜の花弁の塩詰めをトッピング・・・。まあ自信作。

カップによく冷えたミルクをほどほど入れて、その上から熱い紅茶をたっぷり。

室内に紅茶の香りがぱつと広がります。

「さていただきましょうか」

「うん、待ってたよ」

「・・・え!？」思わず紅茶を溢してします。高かったのに・・・。
向かいには、わたしの胸ぐらいまでの子供がいました。頭におしゃ
れのつもりなのか角をつけています。

わたしが紅茶の準備をしている間に、入ってきたのでしょうか、で
も何故ここに？考え込んでいると子供が興味深そうに言います。

「以前呼ばれた気がしたから来てみたが・・・、お茶会への招待だ
ったんだね」

なにやら子供は自分の中で答えを得たようで、すでに卓を囲んでい
ます。

いつの間にかあらわれた子供に対して、呆然としながらも子供の「
以前呼ばれた」という発言があつたため、父への用事でもあつたの
だろうと思うことにしました。

「えっと、紅茶はいりますか？」

どなたかは分かりませんが、もう食すつもりの子供に対して、わた
し一人で食べるなんてことはしませんとも。ええしませんよ？

「ん、私はこれがあるからいいよ」

そう言いながら、腰につけていた瓢箪を手で叩きます。

わたしと子供はその言葉を最後に、ただ貪り食いました。

翌日、父のもとへ訪ねたわたしは昨日の事を話しました。

「む、そんな子供しらんぞ」

「ですが呼ばれたといっていましたよ？」

「子供の勘違いではないのか？小さな子供にはよくあるだろう。それにお前は寺子屋で働いていたのではないのかね？その時に約束でもしたのだろ」父はその様に言っつてすぐに何処かへと出かけて行きました。

「寺子屋で会ったことがあつたかしら・・・」

わたしは結局、その子供の事を思い出すことができずにもんもんとしながら一日を過ごしました。

明日は寺子屋は休みなので、神社にでも行こうと思います。

「道中、妖怪は駄目！！」

そう願った後、わたしは床につきました。

わたし Ⅱ 運動しないと体重が・・・

父 Ⅱ 香霖堂にでもいくか

天狗 Ⅱ どこかにスクープはありませんかね

犬耳天狗 Ⅱ 仕事してくださいよ！！

先生 Ⅱ ひ、久しぶりの二人つきりだな

焼鳥屋 Ⅱ ひ、久しぶりの二人つきりだな

子供 Ⅱ あの人間・・・面白いね

2ページ目（後書き）

進まない話＋矛盾ばかり。

キニシナイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8697y/>

ただの生活記

2011年11月27日21時52分発行